■蒲原塗（古代塗）

天保 10 年（1839）仙台の人仙智と称する者来たり、一種の漆器を製作して仙智塗と称した。仙智は堆朱堆黒の技にも通じ常に好んで古代文様を漆器に応用した。明治元年仙智は卒し、同 11 年仙智塗を古代塗と改称し仙智の門人技を伝えて今日にいたる。

日本漆工の研究　　沢口悟一著　より

清水区蒲原に三階倉庫を持つ渡邊家があります。家業として木材商を営み、屋号を木屋と言いました。渡邊家文書「木屋江戸日記」に蒲原塗について記載があります。

日記から明らかになった蒲原塗（古代塗）の創始者「彫師栄助」の人物像は次のとおりです。

文化 10 年（1813）奥州白河の生まれで、職業は細工人（塗師、彫師）、天保 12 年 7 月 14 日に蒲原に来たようです。当時の年齢は 29 歳で、本名を栄助といい雅号として、当時の渡邊家の当主守亮（もりあき）の命名で、呼称（せんち）漢字では仙智、遷智、鐫魑と記されています。竜雲寺大門西側に住み、渡邊家奉公人かねを妻に娶り、子供に栄吉がいました。安政 4 年 7 月 10 日享年 45 歳で亡くなりました。この前日大雨で竜雲寺が壊滅状態となっていますので、働き盛りの 45 歳での急死の背景にこの出来事が関係しているかもしれません。栄助の技術は子の栄吉（後井上栄吉）に受け継がれて、明治期には井上古代塗工場を設立し繁栄しました。製品は近辺を始め、東京、横浜、京都、北海道へも出荷され、アメリカにも輸出されたこともあり「蒲原塗」として人気を博したようです。

主な製品は、盆、重箱、菓子器、文箱、硯箱等に加え、つづら（衣装箱）、座卓、箪笥等も作られたようです。それらは、木地に唐草、雲、花、鳳凰、竜、昆虫、海老などの模様を図案化して色彩豊かに配したものです。初期のものは漆を盛り上げて模様を浮きだたせましたが、大正・昭和には、刃物で模様を彫入れたり、紙に型抜きをした模様を貼り、その意匠としました。型紙にブリキ製のものもあったようですが詳細は不明です。

古代塗も、第二次世界大戦で井上宇三郎の戦死によって後継者を失い、現在では残念ながら、古代塗の継承者はおりません。

また、東京国立博物館資料部資料第一研究室加藤室長の調査によると、

古代塗は、静岡県蒲原町（現静岡市清水区）と高知県高知市のふたつの産地で作られた同じ名称を持つ珍しい漆器である。ともに金城一国斎が完成した高蒔絵と技法的に共通する堆彩漆を漆器の飾りとする。

蒲原の古代塗の記録は少なく、創始にかかる伝承もわずかに残されているのみで、地元に伝えられた古代塗の記事をまとめると概ね次のとおりである。

『天保 10 年ころ、僊智（仙智）という仙台藩の藩士が病気療養のために蒲原に滞在した。僊智は病気快癒の後も蒲原にとどまり、子供たちに武芸や学問を教えながら漆器を作り、僊智塗と称した。明治元年、僊智は亡くなり同 11 年古代塗と改称した。古代塗は明治 30 年以降大量生産され、生産額も昭和初期には年額 3000 円にものぼり、アメリカをはじめとして海外に輸出された。戦前まで盛んに生産されていた古代塗も、戦禍で職人を失い戦後は生産されていない』

現在蒲原町個人蔵の僊智山人銘の漆器のうち、「唐草人物古代塗方盆」の模様は、天使、獅子、蛇、唐草など当時としては斬新な模様である。これは、天明年間に発行された「装

剱奇賞」が手本になったと思われる。

さらに革製品に見られる浮彫り風の文様から、堆彩漆の下地の盛り上げと共通する表現を感じ取ることができ、僊智の考案した漆器は唐革細工の浮彫を漆芸技法に写した表現であると考えられる。

古代塗の名称についても、加藤室長が言及しています。

古代塗の名称は、高知県高岡郡佐川町出身で蒲原で余生をおくった田中光顕（1843～1939）と深い関わりがあったと考える。光顕は、宮内大臣を辞した明治 43 年、静岡県富士川町に敷地一万坪の「古渓荘」を築き自適な生活をする。しかし、大正 7 年の米騒動で住民から批判を受け、隣接する蒲原町に「宝珠荘」（後青山荘と改称）を建て余生をおくった。

光顕は、明治 34 年に日本漆工会の二代目会頭に就任し、久能山東照宮の修理をはじめ漆器の改良などの事業を積極的に行っている。光顕が富士川から蒲原へ移住した大正 12 年には古代塗は静岡県を代表する特産品であった。

光顕の事蹟や漆芸に対する興味からも、故郷佐川町で生まれた漆器に命名する機会もあったろうし、土佐と蒲原の二つの土地で生まれた古代塗の名称に関わりの深い人物であろう

現在、蒲原の青山荘は、個人の住宅になっていて、中を見ることができませんが、外観からもよき時代の異国情緒を味わうことができます。

また、蒲原塗の製品は、駿府公園内にあった第 34 連隊の除隊記念品として、隊員に渡されたと伝えられています。